

農総研所蔵の特殊文庫関連文献について

ちばおさむ
千葉 修

1. はじめに
2. エイメリー文庫
3. 荷見文庫
4. 日農研文庫
5. 東畑文庫
6. 和田文庫
7. おわりに

1. はじめに

「図書館こそは、総研の心臓である」⁽¹⁾とは、かつて総研 30 周年記念誌に寄せられた加用信文・元次長の言葉である。総研来所者に研究業務を説明する早道は、図書館に案内することであろう。

農業に関する社会科学文献を中心とする当図書館の約 32 万冊（2000 年現在）の蔵書の中で、ユニークなのは五つの特殊コレクション、すなわち、受け入れ年次順に、エイメリー文庫（1957 年）、荷見文庫（1965 年）、日農研文庫（1978 年）、東畑文庫（1985 年）、和田文庫（1986 年）である。エイメリー文庫と東畑文庫については冊子目録があるほか、個別の解説も散見される（最近では宮前〔14〕）。しかし、他の 3 文庫を含む全体については一般の図書館案内書で簡単な紹介がなされる程度である（最近では馬場萬夫ほか『東京の図書館 23 区編』東京堂出版、2000 年）。

当図書館が特殊文庫を開設する折々、関係者はその特徴や由緒について興味深い記述を残しているが、その多くは、かつて当研究所が純然たる所内報として刊行した『総研月報』⁽²⁾に掲載され、一般には目にされることも稀なまま埋もれている。

本稿では、これらに着目して五つの特殊文庫に関する文献リストを示すとともに、内容を簡単に紹介して図書館利用者の参考に供す

ることとする。なお、敬称は原則として氏とさせていただきます。

2. エイメリー文庫

1957 年設置（約 2,400 冊）。

原所蔵者の George Douglas Amery（1890～1955 年）氏は、イギリス農務省を経てオックスフォード大学講師となり、A. ヤングを中心とした農書の書誌学的研究を専門とした。

当文庫は、他の 4 文庫が寄贈されたのと異なり、古書市場から購入された。その発端は、1956 年ロンドンの古書店から東京の古書店に、「イギリス農業経済に関する」コレクションの日本での売り先を探す依頼があったことにある。わが国の高度経済成長が開始されようとするこの時期に、イギリスの古書市場にとって日本が魅力的な顧客であったのかどうかは定かではない。

ともあれ、カタログに代わる約 3 千枚のカードがまず持ち込まれたのは東京大学農学部であり、椎名重明氏（当時助手）によってその質の高さが確認された。しかし、同学部には予算がないため、椎名氏は農総研の加用次長（1952～1965 年在任）を紹介した。農総研では、東畑精一・農林水産技術会議会長（東大教授と兼任。1956 年 6 月まで農総研所長）の支援で特別予算が手当てされ、その購入に漕ぎつけた⁽³⁾。

「イギリス本国でも利用されていないよう

な稀観の文献・資料類を含」⁽⁴⁾んで、「イギリス農学の群書類集」⁽⁵⁾とも譬えられた、その全容は『エイメリー文庫蔵書目録』で見ることができる。この質的・量的に充実したコレクションは、加用氏の農法研究を始めとする、わが国のヨーロッパ農業史研究のための資料的基盤となったと言ってよい。

これほどのコレクターがいかなる人物であったかについて、訪英中の古島敏雄（東大）・椎名重明（同）両氏がエイメリー未亡人への訪問などにより情報を収集したことを、愛甲勝矢氏（1955～1961年当時、農総研資料部長。以下同様）が伝えている⁽⁶⁾。冒頭のエイメリー氏の略歴紹介はこれによっている。

3. 荷見文庫

1965年設置（約2,100冊）。

荷見安氏（はすみ・やすし 1891～1964年）は、1929年から1937年まで農林省の米穀課長・米穀部長・米穀局長を歴任して米穀流通政策の中核におり、「米の神様」の異名をとった。農林次官退官後は、産業組合中央金庫理事長、日本銀行政策委員、米価審議会委員、全国農協中央会会長等を務めている。

氏の遺族から農総研に寄贈された資料の整理にたずさわった山下正元氏（1965～1976年当時、資料部長）は、荷見氏が関係した政府委員会・審議会等で配布された資料を綴り込んだファイルが約400冊保管されている点に注目して、次のように述べている。

「行政綴にしても本来なら後任者に引継がれるべきものさえ一切切切自宅に持ち帰り保存され、「自分で手に入れたものを丹念に整理し、しかも塵一つゆるがせにしない異常なばかりの収集癖を持ち、いったん自分のものとなったら門外不出」⁽⁷⁾にしたが故に、特異なコレクションが形成されたのであると。

荷見氏は、晩年「米穀法施行40周年記念会」会長として、関係団体等に米穀関係の文献資

料の寄贈を呼びかけ、農林省図書館への「米穀文庫」の設置に尽力した。それと並んで農総研の「荷見文庫」は、米の流通が自由市場から統制へと進む大正・昭和初期の食糧政策の一級資料として、大豆生田稔『近代日本の食糧政策』（ミネルヴァ書房、1993年）等に活用されている。

4. 日農研文庫

1978年受け入れ、1984年開設（約19,200冊）。

1942年、石黒忠篤・元農林大臣らを発起人として（財）東亜農業研究所が創立された。当研究機関は、日本を中心としながら「広く東亜ニ於ケル農業及農村ニ関シ共栄圏確立上必要ナル調査研究」⁽⁸⁾等を目的とし、最大133名の職員を擁したが、1945年の終戦とともに研究領域を国内に限定し日本農業研究所と改称された。研究部門は、経済・化学・種芸・肥料・土地利用等の研究室から構成され、経済研究室の在籍者には川俣浩太郎氏、大内力氏（後に東大教授）のほか、後に農総研に移る岸英次・渡辺兵力・中山誠記氏らの名前も見える。

同研究所は、1964年まで杉並区下高井戸（浜田山）に本部を置き、千代田区紀尾井町に移転した後も同地に分室が存置された。1976年、浜田山の所有地を売却処分するに至り、同分室が所蔵する研究所創立以来の文献資料を農業総合研究所に一括寄贈することとなった⁽⁹⁾。

農総研は、いわば先輩格の研究所が蓄積した図書を引き継ぐことになったわけであるが、当文庫は約2万冊と抜きんで多く、その整理・配架には足掛け7年間を要した。蔵書の中でも特に、第二次大戦期までの中国・朝鮮をはじめとするアジア諸国の農業・経済事情に関する資料に貴重なものが多い。

5. 東畑文庫

1985年受け入れ、1986年開設（約5,100冊）。

東畑精一氏（1899～1983年）は、1946年から1956年まで農総研の初代所長と東京大学農学部教授を兼任したのを始め、農林水産技術会議会長、アジア経済研究所長、農林漁業基本問題調査会会長、政府の各種審議会委員などを歴任した。その「学問的さらには政治的包容力」によって学界、政財界等々多方面に大きな影響力を持った東畑氏を、都留重人氏は「巨星」と表現している⁽¹⁰⁾。

氏の逝去後、その蔵書の多くは農総研・東京農業大学・鯉淵学園・三重県農業技術センターへ分割寄贈された。「東畑文庫」が農総研の他の文庫と異なるのは、寄贈資料の選択が原所蔵者自身でなされたことである。それに立ち会った相馬近人氏（1968～1988年当時、図書課長）は、ドイツ中心の自分の蔵書とイギリス中心のエイメリー文庫についての東畑氏の述懐を書き留めている⁽¹¹⁾。

文庫の紹介は、「東畑文庫目録」に収録された松浦利明・専修大学教授（1985年まで農総研海外部長）の「解題」、相馬氏の「あとがき」に詳しい。東畑氏の著書・論文は、そのおびただしさも理由となって全集・著作集としてまとめられることがなかったが、この文庫はそのほとんどを収集しており、広範な活躍の全貌が把握できる。

6. 和田文庫

1986年設置（約5,600冊）。

和田博雄氏（1903～1967年）は、昭和初期の農林省において「石黒農政」の脈流の官僚として小作問題等を担当した。戦後は農政局長から吉田内閣の農林大臣（1946～1947年）に就任した。農地改革の遂行にたずさわりの

がら、東畑氏と協力して農業総合研究所の創設（1946年11月）を導く⁽¹²⁾。後には政界に転じて、経済安定本部（経済企画庁の前身）長官、日本社会党の副委員長も歴任している。

氏の伝記刊行が企画されるとともに、その執筆のために膨大な蔵書・資料の整理作業を手がけた大竹啓介氏（1975～1995年当時、農総研農史研究室長）は、読書家として有名だった和田氏と日本の知的風土について次のような感懐を述べている。

学校卒業とともに「[学問の世界]をえらんだ人は……『本の虫』とな」って現実から離れ、一方「[実務の世界]をえらんだ人は、『多忙と実利主義]をタテに、サッサと本格的読書から決別してしまう。」⁽¹³⁾これに対して、和田氏は「稀有な実践的知性の人」であったと。

当文庫には、農業関係資料はもちろんのこと、和田氏の多彩な履歴を反映して経済・政治の専門書から教養書まで広い範囲が網羅されている。

7. おわりに

以上の五つの特殊文庫を通観すると、地域的にはイギリス（エイメリー）、ドイツ（東畑）、東アジア（日農研）に手厚く、日本農政の分野では、農政学全般（東畑）、米穀問題（荷見）、農地問題（和田）をカバーしている。

また、農総研の創立に深く関わった人物の足跡をたどるよすが（東畑、和田）としての意義もある。

いずれも歴史的文献であるが、これらを面前にして受ける一種の異時体験感覚は、現状分析にも意外な示唆を与えてくれるのではあるまいか。

注(1) 加用〔4〕、26頁。

(2) 1949年5月創刊、1988年4月＝No.475で終刊。ちなみにNo.300（1973年9月）、No.400（1982年1月）に著者別索引が付されている。

- (3) 以上は佐藤〔15〕, 17頁による。
- (4) 加用〔13〕, 序文。
- (5) 愛甲〔1〕, 14頁。
- (6) 愛甲〔10〕, 同〔12〕参照。
- (7) 山下〔5〕, 56頁。
- (8) 日本農業研究所〔18〕, 30頁。
- (9) 同上, 356頁参照。
- (10) 都留〔20〕参照。
- (11) 相馬〔7〕, 14頁参照。
- (12) 東畑〔19〕, 121・127頁, 大竹〔22〕(上), 327~8頁を参照。
- (13) 大竹〔9〕, 30頁。

【参 考 文 献】

○各文庫の解説・目録

- 〔1〕 愛甲勝矢「農学古典のコレクション——エイメリイ蔵書の内容と価値——」(『農林水産図書資料月報』9-11, 1958年11月)
- 〔2〕 農業総合研究所「エイメリー文庫蔵書目録」(1959年)
- 〔3〕 農業総合研究所図書課「エイメリー文庫蔵書目録追録」(『総研月報』No. 177, 1963年6月)
- 〔4〕 加用信文「エイメリー文庫のことなど」(農業総合研究所『総研三十年』, 1976年。追憶文集刊行世話人編『追憶の加用信文先生』, 御茶の水書房, 2000年に収録)
- 〔5〕 山下正元「故荷見安氏寄贈図書資料を整理してみた」(『総研月報』No. 200, 1965年5月)
- 〔6〕 「資料部記事」(『総研月報』No. 207, 1965年12月)
- 〔7〕 相馬近人「東畑先生の思い出」(『総研月報』No. 417, 1983年6月)
- 〔8〕 農業総合研究所「東畑文庫目録」(1986年)
- 〔9〕 大竹啓介「『和田博雄蔵書』によせて」(『総研月報』No. 326, 1975年11月)

○原所蔵者・機関の年譜等に関して

- 〔10〕 愛甲勝矢「故エイメリイさんについて」(『総研月報』No. 122, 1958年12月)
- 〔11〕 古島敏雄「オックスフォード便り——エイメリー夫人を訪ねて——」(『総研月報』No. 123, 1959年1月)
- 〔12〕 愛甲勝矢「エイメリイさんの略歴と写真」(『総研月報』No. 127, 1959年5月)

- 〔13〕 加用信文『イギリス古農書考』(御茶の水書房, 1978年)
- 〔14〕 宮前正義「『エイメリー』文庫」(『びぶろす』48-9, 1997年9月)
- 〔15〕 佐藤毅「加用先生とエイメリー文庫」(追憶文集刊行世話人編『追憶の加用信文先生』, 御茶の水書房, 2000年)
- 〔16〕 農林省図書館監修『米穀文庫目録』(米穀法施行40周年記念会, 1963年)
- 〔17〕 荷見安記念事業会『荷見安伝』(1967年)
- 〔18〕 日本農業研究所『日本農業研究所五十年史』(1992年)
- 〔19〕 東畑精一ほか「創立十周年記念座談会」(農業総合研究所『総研十年』, 1956年)
- 〔20〕 都留重人「農業近代化と人材育成に情熱——巨星・東畑精一氏を悼む——」(『朝日新聞』1983年5月10日付夕刊)
- 〔21〕 故東畑精一先生合同葬実行委員会編「東畑精一先生の足跡」(1984年)
- 〔22〕 大竹啓介「幻の花——和田博雄の生涯——上, 下」(楽遊書房, 1981年)